



留学先で見たこと聞いたこと

～世にも奇妙な産科医がカエデの国で基礎研究～

濱田 裕貴 産婦人科



なぜ留学に行こうと思ったのか？基礎研究に興味があり医学部に入るも、分娩の魅力に取りつかれ産婦人科医として歩み始めた。野戦病院で臨床を叩込み、大学病院での先端医療に触れ、現代医療の限界を感じた。産科医にできることは、安全な児娩出と新生児医療への架橋のみ。「周産期医学の発展には基礎研究が不可欠」という一種の使命感を抱き大学院に進み研究を始めた。学位取得後も研究に打込める環境を求め、行き着いた答えが海外研究留学。いわゆるコネは無かったが、大学院時代の研究成果を発表した国際学会で、とある研究者と知り合い、運よく留学先が決まった。

留学先のカナダは移民に優しい国で、申請にかかる一切の雑用を行う「ビザ申請代行業」なるものが存在し、多忙な臨床業務を抱える身としては利用しない手はない。春に単身渡加、生活基盤を整え、夏休みに家族を迎え入れた。実はコーヒー好きなカナダ人、某大手コーヒー店の国民一人当たりの店舗数が、実は世界1位。宮城県で例えるなら、日本では大崎市（13万人）に1店舗あるのに対し、カナダでは亘理町（3.5万人）規模にも1店舗存在することになる。雪国ながらスポーツは盛んで、夏は野球（MLB：Blue Jays 図1）やテニス（ATP1000：Canadian open）、冬はバスケットボール（NBA：

図1：Blue Jays ホームスタジアムで観る本場の野球は鳥肌もの



図2：キャンプには何度も行き、だいぶこなれた雰囲気

Raptors) とアイスホッケー（NHL：Maple Leafs）など、年中世界一流のスポーツを楽しめる。春はメープルシロップ狩り、夏はキャンプ（図2）、秋は果物狩り、冬はスケート（図3）と、アウトドアも通年で充実。留学中の身分ゆえ経済的な余裕は無いものの、仕事は9時-5時/平日のため家族との時間が多く、すごく満たされた生活であった。

少し舵を切り、研究生活について述べる事としよう。留学先はトロント大学医学部生理学教室 Stephen Matthews ラボ（図4）。総勢10名の大き



図3：無料で開放される屋外スケート場



図4：毎年クリスマスにはラボの皆でディナーを

くないラボだが、多民族国家カナダを象徴するような民族構成で、欧州、アジア、南米出身の研究者が在籍し、互いに敬い、思いやり、程よい距離感で接している。ラボの研究テーマは、妊娠中のステロイド暴露が胎児の脳発達に与える影響。大学院の時の一番の違いは、研究員各々が自分主導のプロジェクトを持ち、高い士気を保ちながら研究成果を挙げていることである。これには2つのカラクリがある。1つ目は「自主性」。研究の立案、実験、解析、投稿に至る課程を自分で考える。テーマは与えられるより、自分で導き出した（実はボスに導かれている？）方が、研究に対するモチベーションが遥かに高い。2つ目は「報酬」である。研究員は大学生であっても給与が支払われる。その背景には潤沢な研究資金がある。研究所主催のチャリティーイベントやプロスポーツ選手からの多額の寄附などが、研究助成金の資金源となっている。

留学最大の収穫は、ディスカッション能力の飛躍的な向上であろう。ラボには「自分のデスク」は存在せず、共用の長机が一つあるだけ。なんとなくの定位置こそあるものの、仕切りが無いので開放的で、日常的に雑談交じりの討論が行われている。ミーティングも頻繁にあり、こうした日々の討論を積み

重ねが、いざ学会での受答えに活きる。学会参加が多いのも留学ならではの。留学中3年間で国際学会2回、国内学会2回、いずれも口頭発表の機会に恵まれた。欧米人はプレゼンが上手いと称されるが、努力の上に成り立っていることを痛感する。いざ口頭発表に選出されると、毎週のように発表の練習が行われる。スライド構成のみならず、配色、配置、フレーズ、アニメーションなど、事細かにダメ出しが入る。それが本番での良い発表につながる。幸いにも国際 DOHaD 学会で若手優秀口頭発表賞を受賞した（図5）。

公私ともに充実した留学生活は、コロナ禍により突然の終焉を迎える。大学全体がロックダウンされ研究活動は凍結。日本行きの飛行機も2週間以内の欠航が決まり、慌てて帰国の途に就いた。ラボで送別会が出来なかったことが悔やまれる。しかしコロナで良いこともある。リモートワークが一般的になり、日本からでもリモートで研究を進め、論文投稿まで漕ぎ着けた。今でもラボの Web ミーティングに参加している。

帰国後は、周産期の臨床現場に身を置きつつ、日常臨床の疑問を解決する研究を行うのが理想だが、日々の臨床・研究業務に埋もれぬよう必死に働いているのが現実だ。支援いただいた多くの方々に感謝し、後輩に研究や留学の支援をしつつ、産婦人科医学の発展に少しでも貢献したい。



図5：国際 DOHaD 学会 2019 で若手優秀口頭発表賞を受賞